

毎年、夏期講習を終えた時期にこの原稿を依頼されるので、また一年が経ったんだなあという時の流れを感じると共に、18年、こうした夏を繰り返しつつも、一度として同じ夏がなかったこと、子供達はひとりひとり、本当に異なる個性をもっていることを実感します。

それぞれが持つ、その個々の色で輝かせたい……私は常にそう考えています。

ある校長先生がお話の中で「本来、学校のカラーとか、学校によって決まったタイプなどあるはずがない。教育に於いて、それはあってはならない」とおっしゃいました。また、別の校長先生も「どういうお子さんを望まれますか?」と伺ったところ、「元気で素直に人の話が聞ける子であればいいのです」とお話下さった後に、「もし私共がこんな子が欲しいと言ったら、みなさんは、ご自分のお子さんをそういう子に作り変えようと思えますか?それはできないし、してはいけないことなのです」と続けられました。

確かに、私立小学校の先生方は、その子その子をひとりずつよく見て判断しようとなさっています。決してこういうタイプの子供たちを集めようなどとお考えになっていないはず。ですから、〇〇校向きとか、〇〇校のカラーなどという言葉は、誰かが意図的に造り上げたものでしかないのです。

我が子の良い所をしっかりと認識して、そこを充分伸ばして自信を持たせてやりつつ、足りない所も冷静に見極めて、親子でコツコツと努力して、学力も精神力もバランスのよい子供に育てれば、どこの学校にも胸を張って、「どうぞ、うちの子を見て下さい」と向かうことができます。

最近の親御さんを見ていると、子供が何かする前にその先のことを心配して、「こうなったらどうしましょう」「うちの子はこうなると思うのですが……」と相談に来ます。我が子のことをよく理解しているようで、その実、わかっていない。親がいつの間にかそのような子供にしているのです。常に親からのコントロールでしか行動できない、自分を表現できない、ロボットのような子供が増えつつあることが、とても心配でなりません。

私はよく、ご父母に「やらせることのつらさより、やらせないことのつらさ」という話をします。できないからとか、やりたくないからと言って排除したり、避けて通っていたのでは、いつまでたっても克服することはできません。これから先、すぐそこに待っている小学校の集団生活の中でさえ、そんな場面は数限りなく訪れる事でしょう。その度に親がかばっている訳にはいかないのです。それならばむしろ、幼児期にも、できないこと、嫌だけどやらねばならないことがあることをきちんと理解し、それに立ち向かっていく精神力とひたむきに努力していく忍耐力を養っておいてあげることこそが親としての務めであると考えます。励ましながら共に努力することで、子供は親を手本として、学んでゆくからです。

社会に出ればどれだけの困難な事や苦労や悲しみに出逢うとも限りません。そんな時にも、しっかりと前を向いて立ち上がれるだけの強い信念を培う為には、今から小さな失敗や、それを努力によって克服した喜び、達成感等を味わう経験をたくさん与えてあげることが大切です。

楽をしては大きな喜びや幸せは得られないことを幼児期に体得した子供は、自分自身の意志で、目標に向かって努力できる向上心のある自律した子供に成長するはずです。

アリスの第二教室には、一枚の絵があります。それはフランスの画家 J.F.ミレーの「種をまく人」です。もちろん安価な印刷ですが、私がこの絵を購入したのは、今年の夏。昨年度のこのページに記しましたが、その二番目の目的が山梨県民美術館に展示されている本物の「種をまく人」を観ることでした。

この絵は、私に勇気と希望を与えてくれたからです。

ノルマンディーの貧しい農夫の子として生まれたミレーは、はなはだしい貧困の中でも絵を描き続け、ようやく26歳にして、肖像画がサロンに入選し、貴族やブルジョアジーにも認められ、おおかえ画家としての地位や名声を手に入れることができました。にもかかわらず、それらの全てを投げ出しても「私が本当に描きたいものは、これではない！」と、農民画家として生きる道を選択します。きっと、ミレーは自分の中の自分に、嘘がつけなかったのでしょうか。ごまかして生きて行くことができない……。そんな人だったに違いありません。約束された安定した生活を捨てたミレーを、周囲は「なんてバカなことを……」「もったいない」とどんなにか批難したけれど。しかしそんな中で彼が描いた作品が、この「種をまく人」でした。向こうの空は暗雲がたち込め、今にも嵐が迫り来る気配を想わせています。だが、農夫は前をしっかりと見据え、その力強い足を大地に大きく踏み出しています。そして、その手はいつか訪れる希望の明日に向かって、種をまく……。

「どのような強い風が吹こうとも、私は私の種をまく」たとえ、いかなる妨害や障害や困難が待っていようとも、自分の信念を貫く為ならば、胸を張って立ち向かっていこうというミレーのメッセージなのだとされています。彼の崇高な想いがひしひしと伝わってくる作品です。

5年前、私はアリスを開校する時、この絵を思い浮かべていました。私も、後ろを振り向かず、まっすぐにただ前を見つめて私の種をまこう。その種が強風や嵐に吹き飛ばされてしまったとしても、たとえたった1粒でも大地に根づいてくれれば、それを大切に育て、きっと次には多くの種をもたらしてくれることだろう。

今、その種からたくさんの実りをいただき、共に支えて下さった多くの温かい皆様への感謝の想いと、アリスの子供達ひとりひとりが自分の種を見つけ、胸を張って種をまく人になって欲しいと願って飾りました。毎日、アリスの頑張る子供達と揺らぐことのない私の信念を見守ってくれています。

想えば、小学校時代、教室の黒板の上に担任の先生が、貼ってくれたミレーの「落穂拾い」と「晩鐘」の絵がありました。最近になってふと先生はきっと私達に「努力」そして「感謝」ということを教えたかったのかもしれないと思うようになりました。恩師が亡くなられて10年も経って、ようやくその想いに気づいた何とも情けない教え子を、きっと天国で腑甲斐なく思っ怒っておられることなのでしょうが、いつか、私の想いも、アリスの子供たちにそんな風に届くことを信じて。教育とはそういうものだと思うのです。